

ロシア

国内旅行ブームは商機の苗床か

ジェットロ サンクトペテルブルク事務所長 宮川 嵩浩

ルーブル安を背景に国内旅行が脚光を浴びている。ロシア人の旅行先が海外から国内にシフトしているのだ。国内各地で開催される国際スポーツイベントを契機に観光インフラの整備が進展。主要都市では観光関連サービスの需要増が見込まれる。

進むインフラ整備

2015年にロシアを訪れた外国人の数は3,135万人。訪日外国人数の約1.6倍に相当する。CIS諸国や欧州、中国といった近隣諸国からの訪問者が多い。外国人訪問者数(15年)でロシアは世界で第10位(第1位フランス、第2位米国、第3位スペイン、第16位日本)。訪日外国人の増加に加え、ロシア人が旅行先を海外から国内にシフトする動きが見られる。背景には、14年12月以降の急速なルーブル安、主要旅行先だったトルコとの関係悪化、エジプトでのロシア旅客機墜落事故……などがある。国内の主な人気観光都市は、サンクトペテルブルク、ソチ、モスクワ、カザン、エカテリンブルクなど。国内に計26カ所の世界遺産を擁するロシアは、世界遺産の登録数では世界第9位だ。

ロシア政府は11年8月、連邦目的別プログラム「国内旅行、インバウンド旅行の発展(2011年~2018年)」(2011年8月2日付ロシア連邦政府決定第644号)を策定、国内の観光振興に取り組んできた(表)。同プ

ログラムの管轄機関であるロシア連邦観光局は、主な課題として、①エコノミークラスのホテル整備、②国内線(航空便)の路線拡充と運賃の低廉化、③査証手続きの簡素化(日本人の場合、現状ではロシア入国に査証を要する)、の3点を挙げる。国内で開催される国際スポーツイベントに合わせ、政府は、主要都市における観光インフラ整備(空港の改修、空港から市内へのアクセス向上、ホテル建設、公共交通機関の利便性向上など)を進めてきた。13年7月のユニバーシアード(カザン)、14年2月の冬季オリンピック(ソチ)、18年6~7月のサッカー・ワールドカップ(モスクワ、サンクトペテルブルクなど全11都市)などがそれだ。加えて韓国との間では、韓ロ査証免除協定に基づき、14年1月から観光や商用目的での60日以内の滞在は査証免除とするなど、査証の簡素化も進めた。

サンクトペテルブルクの人気上昇

サンクトペテルブルク市は北西部に位置するロシア第2の都市。約200年にわたってロシアの首都だった当地には当時の古い街並みが残っており、今も文化や芸術の中心としてロシア人から愛されている。事実、15年には来訪観光客数が同市の人口523万人をも上回り、650万人と過去最高記録を更新した。うちロシア人は前年比2.7%増の370万人と、同じく過去最高記録を更新。05年の190万人からこの10年間で約2倍になった。旅行情報サイト「トリップアドバイザー」の人気都市ランキング2016でも世界第14位(ロシアでは第1位)に入り、外国人にも人気の都市だ。世界三大美術館の一つに数えられるエルミタージュ美術館をはじめ、郊外には歴代のロシア皇帝が過ごした離宮が点在する。市内外に見どころとなる世界遺産があり、旅行者は通常3~5日かけてじっくり観光する。

表 連邦目的別プログラムの概要

プログラム名	国内旅行、インバウンド旅行の発展(2011~2018年)
根拠法	2011年8月2日付ロシア連邦政府決定第644号
目的	ロシアの観光市場の競争力向上
主な課題	・観光、レクリエーション施設の発展 ・観光サービスの質向上 ・国内外の市場における観光ツアーのプロモーション
期待される主な効果 2009年→18年	ロシア人の宿泊施設利用者数: 2,820万人→3,500万人 外国人の宿泊施設利用者数: 350万人→870万人 観光サービス利用額: 780億ルーブル→1,780億ルーブル 宿泊サービス利用額: 1,060億ルーブル→2,205億ルーブル
予算規模	1,417億ルーブル(2011~18年)

注: プログラム作成開始時点(2010年)で確定していた数値(2009年)が基準となっている
 資料: 2011年8月2日付ロシア連邦政府決定第644号を基に作成

サンクトペテルブルクへのここ数年の観光客増加の背景要因は何か。①主要な観光名所の修復作業が段階的に進み、名所の魅力が向上した、②13年末に空港の国際線ターミナル新設工事が、15年初には国内線ターミナルの改修工事がそれぞれ完了し、空港の利便性が向上した、③列車の増便により、モスクワ（約4時間）やヘルシンキ（約3時間30分）への鉄道アクセスが改善した——などである。加えて、特定のクルーズ船でサンクトペテルブルクに訪れる外国人に対しては、査証なしで72時間以内の滞在が許可されるという制度も観光客の来訪を後押ししている。こうした状況に鑑み、空港でのトランジットに関しても同様の措置が検討されている。空港と市内中心を結ぶ直通列車の運行についても議論されている。現状では、空港から市内へは公共交通機関を乗り継いで行く必要があるためだ。このように制度面を含む観光インフラ整備は、今後も進展していく見通しである。

15年のサンクトペテルブルク市の観光収入は、歳入の10%に相当する440億ルーブル（約730億円）に達した。市政府もこれを重要な収入源としてみており、観光産業の発展に力を入れる方針を打ち出している。同市は「サンクトペテルブルクの文化・観光発展プログラム（2015年～2020年）」（14年6月17日付サンクトペテルブルク市政府決定第488号）を策定している。

ホテルやアミューズメントパークに需要

サンクトペテルブルク市観光発展委員会は、同市を訪れる観光客はさらに増え、16年は680万人に達すると見込む。不足気味のエコノミークラスのホテル、アミューズメントパークの建設・運営、医療サービスの提供など観光客向けサービスの充実が望まれる。

15年時点の市内の宿泊用客室数は約1万6,700室。客室稼働率は年間平均で60～65%、夏場のハイシーズンでは95～100%に達する。1部屋当たりの平均宿泊料金（15年）は、6,800ルーブル（約1万1,200円）。16年～18年にかけて、ヒルトンやロッテプラザといった大手を含む7ホテルが新規にオープンする予定だ。またサンクトペテルブルク市投資委員会によると、同市を訪れる観光客が21年までに年間730万人に増えることを想定し、エコノミークラスのホテルを中心に、16年以降の5年間で20のホテルを建設する計画がある。

さらなる観光客誘致も視野に入れ、アミューズメントパークやテーマパークの建設も計画されている。例えばサンクトペテルブルクから西に約30キロのペトロドヴォレツ。ここでは映画の普及とサンクトペテルブルクのイメージ向上を目的として、映画スタジオとインタラクティブ・ゾーン、アミューズメントパーク一体型の施設「キノグラド」の建設が計画されている。また、サンクトペテルブルク市関係者は、「海」に関連するテーマパークの建設を日本企業と協力して進めることに期待している。サンクトペテルブルクには現在、アミューズメントパーク「ディボ・オストロフ」やウオーターパーク「ピテルランド」などがある。

ロシアアミューズメントパーク・アトラクション協会（RAAPA）によると、ロシアのアミューズメント市場はここ5年間で4倍に拡大したという。乗り物運行、カフェ・レストラン、小売店（土産物販売含む）、イベント開催、機器レンタル、スペースのサブリース、といった関連サービス部門の15年の売上高は24億4,700万ルーブル（約40億6,200万円）となり、市場規模は拡大を続けているという。

観光客の来訪が多い連休に合わせて同市の歴史や文化を紹介するイベント（歴史建造物を背景にしたプロジェクトマップなど）も開催されている。個人観光客向けとしては、エクスカッション（体験型の見学ツアー）スタンドが市内中心部に設置されており、希望のツアー（英語ツアーあり）を申し込める。

観光収入のさらなる増加を目的に、医療観光発展に向けた計画も進行中だ。治療目的で訪れる観光客から同市が得ている年間収入50億ルーブル（約83億円）を倍増させるべく、サンクトペテルブルク市観光発展委員会主導により、「2025年までの医療観光発展プログラム」を16年末までに策定する動きがある。現状では、特に歯科や形成外科などのニーズが高いといわれる。今後の課題としては、安価な医療サービスの提供、観光客向けの医療施設の建設、地方都市からのアクセス向上などが挙げられる。

ここまでサンクトペテルブルクを例にとってロシアにおける観光需要の高まりを見てきた。同市以外の都市でも観光が新たな収入源として注目され始めている。今後は、観光インフラ整備や観光客を対象とするサービスへの需要増大が見込まれる。

